飯田川村適産調旧蹟考

石川理紀之助著

飯田川村適産調旧蹟考目録

下虻川

地勢岩石土壌……1
東部の地景……1
西部の地景……1
下虻川村移転……1
長者屋敷　同井戸跡……3
山林　田租改正……3
狐森……3
古川敷……3
川堀替の事……3
城の内……3
八ツ口橋……4
船附場……4
旧国道……4
治郎右衛門堰……4
大堰……4
神明神社……4
二荒山……5
東伝寺……5
人口古今比較……5
余業……5

和田妹川

地景岩石土質……5
御伊勢山……5
苗代沢の土壌……7
大宮沢の寺跡……7
横根の岩石構造……7
和田五郎の古館……7
六鹿沢……7
逆島……7
佐渡屋布……7
七色水……7
大石沢の大石……7
和田妹川の名称……8
旧国道……8
旧功労者の事跡不明……8
孫兵衛堰……8
観音森の古碑……8
諏訪神社……8

飯塚

地景岩石土質……8
古館及村名……10
水神端　古宮地　不動瀧　石器産地……10
巣崎……10
腐植土の地……10

産土神の移転……10
旧国道……10
塚越……10

金山

地景岩石土質……10
冷泉……10
金山の村名及金屑畑……11
石英粗面岩の砂……11

飯田川旧蹟考付録

飯塚十王堂……11
飯塚観音堂……13

南秋田郡適産調旧跡考

総理　石川理紀之助著

旧跡考は村落毎に古代の変動に寄り紀号岩石土壌其他地名の起源、神社仏閣の由緒等伝説口碑を始め地景名称によりて考ふる処を将来参考のために記す。併せて村事上の雑事をも加ふ。

飯田川村

飯田川の名称は町村制を置かれたる時に飯塚村、和田妹川村、下虻川村、金山村の四ヶ村を合併して各村の文字を合して名称とす。

下虻川

地勢岩石土質

山は第三紀にして耕地は第四紀の新層なり、古層の残るは僅少なり。頁岩多し、山には石英粗面岩の砂の冠れる地多し。岩崎杯には砂岩も交れり、岩崎の砂岩は脆けれども、中には少し石材となるも交れり。近年川沼の畑地多く田に開くるを以て、土質は埴土、腐植土、壌土多し、砂土少し。川に土砂を流す故に川口次第に浅せ附寄洲を生ぜり。

東部の地景

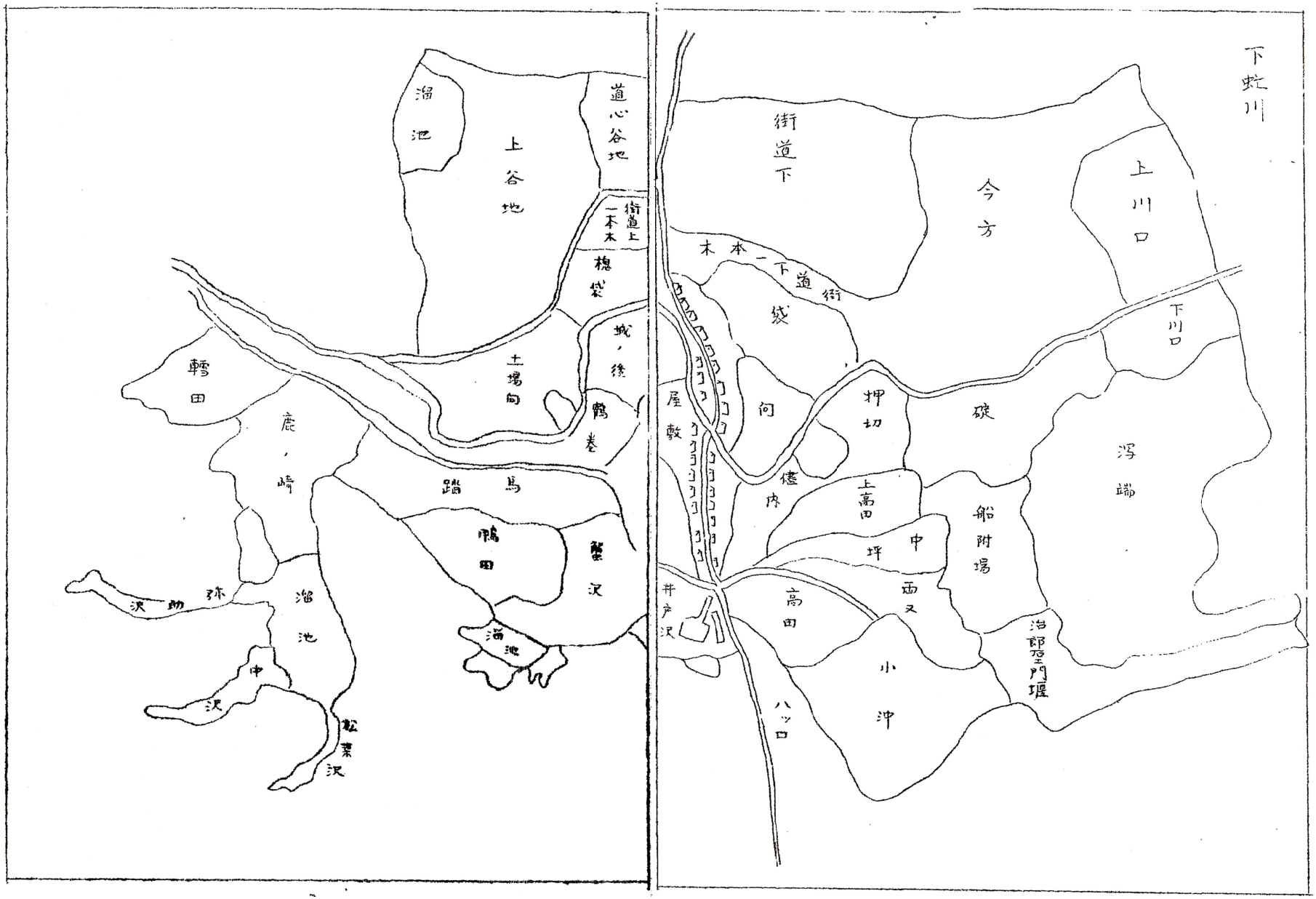
東部の奥和田、虻川、山田の地界に松葉沢、中沢、弥助沢の三沢あり。是は変動によりて谷をなす。其水勢鹿の崎に出て第四紀の古層を押破りて轌田に出て、同時に龍毛の方より押し出したる水勢と合して山崎を折り回り西方に流れ、又同時に蟹沢、井戸沢破れて今の寺の岡の麓に淀む。其時馬踏の南西部より釈迦前の今の屋布の後通に一筋洲崎の如きもの残れるなり。故に鹿の崎、轌田、馬踏、鴨田、蟹沢、井戸の沢等の田地多く腐植土を以てなれり。

西部の地景

羽立の西部の方は既に説けり。高田、碇の上段杯は一段高く、土質の粘力によりて変ぜざれども其他仲坪、沖、両又、下高田、小沖等は岩崎の砂岩の交りて壌土質となれり。又潟端等は三十年前迄は葭谷地なりしを開田せしものにして、未だ熟田に至らず皆腐植質なり。岩崎、今の小学校の（国道より西の田沿にあり）周囲は下層盤なり。是等は素と岩山の突き出たる処にて、次第に其砂岩を田地に運び終に田地となりし処ならん。岩崎の名是より出たり。

下虻川村居移転

素と中屋敷という処に村居ありて、今の龍毛道川沿より土場向に曲る角に対する川北に当りて寺屋敷の跡


下蛇川
街道下
今方
上川口
木本一下道街
下川口
屋敷
押切
碳
浮瀦
船附場
上高田
中
坪
井戸沢
高田
西又
治郎左門堰
小沖
ハッ口
道心谷地
淵池
上谷地
街道上
一本木
槐袋
城ノ後
土場向
鶴巻
轡田
鹿ノ崎
踏鳥
鴨田
蟹沢
淵池
弥助沢
淵池
中沢
松葉沢

あり。又中屋敷には伝七の屋敷跡あり（佐藤家の旧家なり）。又鶴巻より土場向に渡る橋を又兵衛橋といふ。是は橋を渡れば門間又兵衛といふものゝ屋布跡あり、其南隣に鐙勘之丞の屋布跡あり、いづれも当村の旧家なり。今の村居に移りたる頃東伝寺も同様に移りて、今の字屋布の内寺小路の奥、儘の内といふ処に寺あり。其後火災に罹りて今の井沢の岡に移れり。

長者屋敷　同井戸跡

字上谷地南部の最端にあり。国道に沿て道心谷地といふ処ありて其東に隣せり。少し地高く今も畑地多し。又畑地を近年田になしたるあり其田中に長者屋敷の井戸の跡とて小き森に残れり、年代いつの頃なるか不明。

山林　田租改正

天保年間肝煎市太郎村内薪柴の乏しきを憂へ今の山林を取立家割山を設く。又弘化四年検地改正をなして高百石余の減石をなせり。

狐森

字街道下にあり。今の羽立の村端西南には畑地多くありて藪地ありしに狐の多く住み、三四十年前までも狐穴ありしよし。今も古き杉一本残れり。

古川敷

旧豊川の流れは羽立の東部家の後を流れ字槐袋といふ（大なる槐の一樹七八十年前迄ありしといふ。袋とは周囲川溝杯のありし形をいふ）の末より西に国道を横ぎり今いふ七色堤（是も古川の淀跡の溜地となれるなり）より字袋といふ処の東西二つ筋に川跡あり。東部の方は古く、西部の方は其後の川あとなり。其川跡の周囲にあれば袋と名づけしならん。而して其末今の川筋に出たるなり。国道には土橋を架せしなり、今も一段低く其跡見ゆるなり。其近きに土橋の家といふ一戸あり。其川の存せし頃は此家のみにて、今の羽立の神明社より南部には家なかりし由なり。

川堀替の事

寛文年間佐竹義隆殿休處を設けらる。其当時火災の事を憂へて前にある土橋の方を埋め今の川筋に堀り替しといふ。其川筋城の後を巡りて村中を経て字向と儘ノ内の間押切迫堀割りたるなり。

城の内

寛文年間領主佐竹義隆殿（鑑照院と号す）御休処を設けられたる地にして、今の題目堂其跡なり。字城の後には小堀のあと杯もあり。

八ツ口橋

字屋敷の北部の末の岩崎との間に八ツ口橋といふあり。是れは天王村牛頭天王の祭事に八またの大蛇の古例あり、此等より隣村山田村をやまたとなして此小川より八ツ口の大蛇か出でたる事を作り出せしことのありしを誠の地名に称へしならん。山田村葬事に龍の頭を用ゐざるも此等より出てたるならんか。

船附場

古川口なり。其川筋は字袋より押切を経て中坪、碇の間より船附場に通せり。押切の地名も水害にて川布の押し切れたる称なり。

旧国道

旧国道は八ツ口橋より西に下り、沖の堰根を沿へて沖の掻場より妹川の浜にいづ。田の畦に今も其跡幽に残れり。

治郎右衛門堰

此開溝の由来不明。

大堰

肝煎鐙市太郎天保年間田地水利の乏しきを憂て槻木村苗取沢に堤を築き、其堰筋を擴め大堰と名称す。

神明神社（村社）

羽立にあり（此社より南部は凡て壱本木と唱ふ）。寛文の頃此地に的場あり榎の古樹一本ありしを以て名とす（的場は土場向にもありしといふ）。佐竹義隆殿城の内に御休処を置かれし頃、氏神として神仰せられし神明社を今の社に移したり。其以前字鶴巻に剣神社あり神官北条氏の居宅も其近傍にありしを、合祭して北条氏も神明社の傍に移れり。佐竹君社建立の際記念に社地の四隅に槻を手植されたりといふ。七月十六日祭典あり、戦山の例あり御輿猿田彦尊のおくねりあり。

其謡に

秋の田のそよやと戦ぎと穂に出る君よ君をと守らんとの君代君をと守らんと
桜の花を詠め候て人間はゝおしふやう不ふや連こくゝゝ
君代君をよ守らんとの君代君をと守らんと
鶴亀は池の汀に巣をくんで君代君をと守らんとの
君代君をと守らんと

棟札に

聖主天中天
迦陵頻伽聲大願主大梵天王開眼久保田宝鏡院宥遍　大工　相場茂右エ門
五十嵐理左エ門
奉造立天照大神宮社壇大壇主源義隆公　佐藤庄兵衛
相馬佐兵治

哀怒衆生者
大願主帝釈天王寛文四甲辰年六月二日別当清蔵坊奉行　仁蔵
我等今敬礼　　若木五右エ門

二荒山

井戸の沢の北二荒山上にあり、三吉神社遙拝殿なり。四方の高山を眺み八郎湖を眼下にして頗る絶景なり。本村佐藤重太郎氏三吉神社を信仰すること頗る厚く、明治七年より十四年迄八ヶ年間登山す。常に田畑等の小屋を作るにも太平山の方に方位を採る。終に十一年二荒山に新殿を作り数十年社内を守る。明治廿一年四月教導職試補を授けらる。

東伝寺

曹洞宗派補陀寺末　檀家三百余戸

該寺は元字仲屋敷にあり。其后儘ノ内に移し、明和元年申十月今の地に移る。同年八月竣す。棟上大工当村小滝久左衛門、開山は天室蒼龍和尚、松原補陀寺に在りて羽州上位を占めたる人なり。慶長十年遂に当寺に死去す。現在浅野賢雄氏迄二十六世二百九十一年なりといふ。宮四郎といふ社家あり寺小路に住めり。蛇川ゑへしといふ配札をなせり。御一新後農家となり、今の齊藤鶴治の家なり。

人口古今比較

弘化四年　百二十七戸
現　今　二百十四戸　人口千二百四十九人

余業

八郎湖に沿ひたるを以て漁獲する多し。其種類左の如し。

鮒　鯰　背黒　鮒　グチ　海老多し。

刺網釣針等を用ゆ。冬は氷の下網を用ゆ。四五月頃大雨には鮒鯰等小堰に登りたるを得ることあり。

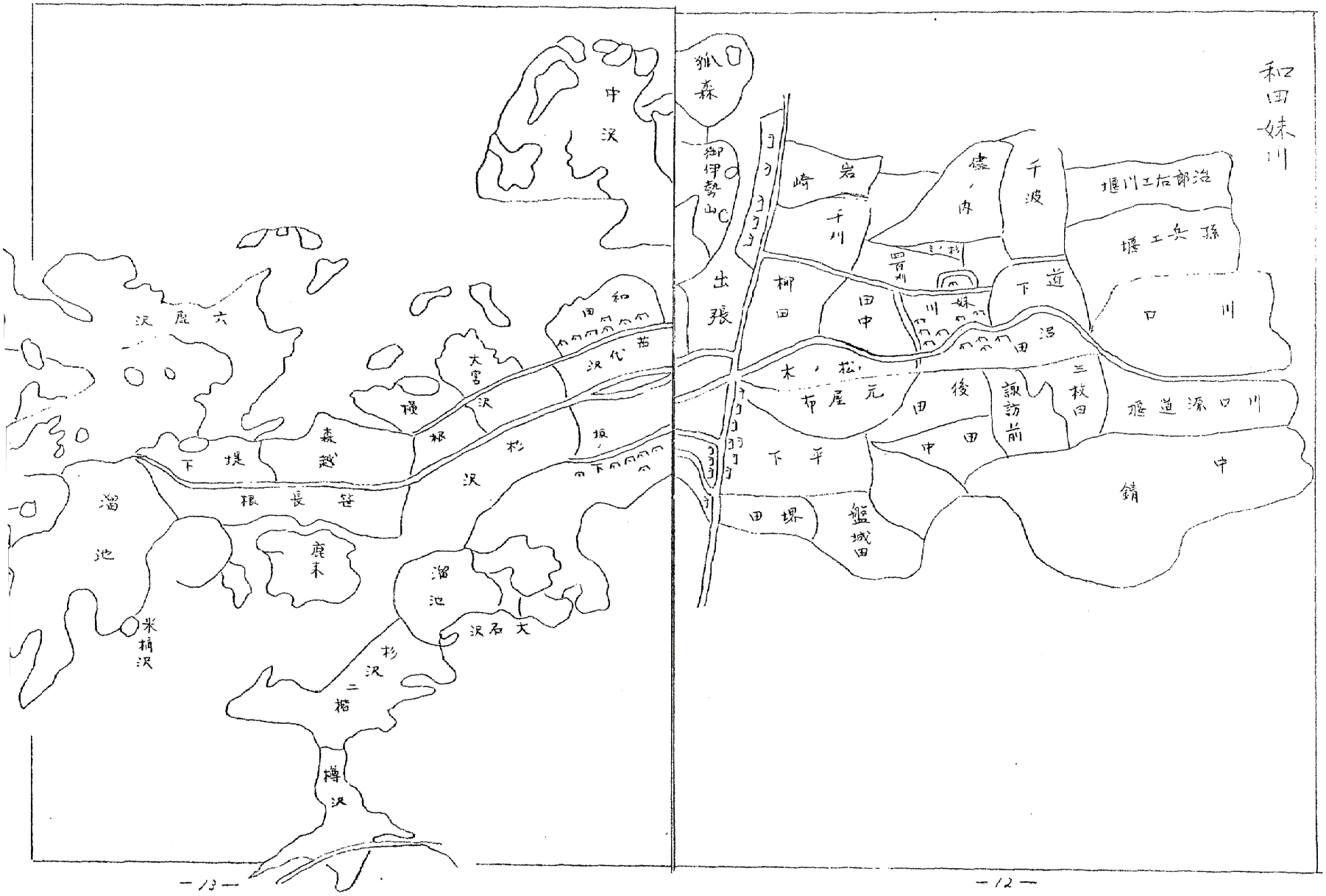
和田妹川

地景　岩石　土質

国道より東部金山に通ずる沢合及中沢は変動の水勢に依て押破れたるものにして、処々に腐植土あれども西部は総て湖面の埋りたる地なり。故に下層に青色の砂土ある処多し。岩石は頁岩、砂岩に石英粗面岩の砂の冠れる地多し。凡て本部落は土壌のよろしき地にして壌土多し。此は石英粗面岩の砂及砂岩の粘土に交りたるものなり。

御伊勢山

小字山根の東部の山上に小祠あり。此小山海砂なり、元押しあげられたるものなるべし。


和田妹川
中沢
猟森
御伊勢山
出張
岩崎
千川
徳ノ内
千波
堰川工右部治
堰工兵孫
口川
下道
柳田
田中
川妹口
和田
代苗沢
大宮沢
横根
杉沢
根ノ
森越
下堤
笹長根
溜池
鹿木
米搗沢
溜池
大石沢
杉沢二橋
樽沢
木ノ松
布屋元
後田
諏訪前
三枝田
堰道源口川
下平
中田
中
錆
田堺
盤城田

苗代沢の土壌

和田村と金山より流るゝ小川の間にして、上下層淡黒色の強埴土にして地柔かにして深し。最上等の地味なる処あり。

大宮沢の寺跡

寺屋敷の跡あり。豊川村槻木照明寺の跡なりといふ。菊地家菩提寺なりといふ。

横根の岩石構造

金山沢より押破れたる変動に独り此横根のみ動かず。此横根は館山の根足北部に突出したる地なり。故に構造の堅固なるを知るべし。且此岩脈北丁西字形になりて又西部に靡けり。東隣に森越といふ字あり、此横根の森越といふ名称なるべし。此横根の堅牢なる為めに森越は大水淀して腐植土を生ぜり。里言にも地震を恐るゝ者は横根に逃がれといふことを伝ふとなり。

和田五郎の古館

大宮沢の南部の山上にあり、和田五郎の館跡なり。和田氏の事は後編に出す。

六鹿沢（菊池惣兵衛及治郎右ェ門の屋敷跡）

横根より小山の間を過ぎ六鹿沢に出づ。沢の入口北に菊池惣兵ェ、南に治郎右衛門の屋敷跡あり。いづれも本部落の旧家なり。六鹿沢は野山の間にありて、野山は石英粗面岩処々に顕る。

逆島

溜池の奥にあり、金山に通う道の北に当る小沢なり。沢の入口近く元雨乞をなしたるだみ堤といふ渕のあとあり（今も俗谷地眼といふ。今は周囲より埋めて田となして纔にのこれり）。

佐渡屋布

逆島の西部の岡にして溜池の岸にあり、俗に佐渡屋敷と唱ふ。旧野帳を見るにさとうちふといふあり。愚按なれば佐藤治部といふ人の屋敷跡なるべし。佐藤氏は当時の豪族にして金山に鉱業を営みたるならん。金山の金屑畑及び此佐藤屋敷にも金屑残れり。又今の国道側屋花に大佐渡、小佐渡橋といふ二ヶ処あり、これも同氏の架設せしものならんか。

七色水

字樽沢にあり、山根より出水して水色折々替るといふ。毒水ならんか、魚類住まずといふ。

大石沢の大石

大石沢にあり。某氏の氏神にして砂岩の大石あ

り以て名とす。

和田妹川の名称

妹川といふは金山より流れ八郎湖に入る小川の名なり。今の浜につゞきて屋花の間に元屋布といふ字あり、此処に元妹川村ありしなり。是は旧国道に便なればなり。今の国道開けしより屋鼻等に移転をなせり（屋鼻の名も元屋敷の端にありし処の名なるべし。羽立杯といふも同じ称にて屋の端といふか）。此妹川と和田村とは別村なるを合併して和田妹川村となりたるなり。年代不詳、凡そ三百年前なるべし。

旧国道

虻川の沖の掻場より田の畦にのこる小道を通して今の浜村に出て、夫より諏訪神社の前を過ぎて飯塚の浜に通せり。

旧功労者の事蹟不明

治郎右ェ門堰は六鹿沢に住したる治郎右ェ門の鑿なるべしといへど詳ならず。其他源道堰、盤丈田なども由緒あらんとおもふなり、考ふべし（治郎右ェ門堰は下虻川にもあり）。

孫兵衛堰

浜妹川伊藤孫兵衛の率先労力を以て溝の利あるを説き、自ら経営して八郎湖より便をなせり。以て孫兵衛堰と名称く。

観音森の古碑

字中錆にあり、元飯塚の土神の社地なりといふ。田の中にあり貞和三壬年八月十二日と梵字を刻したる石碑四体あり。角閃安山岩なり（森山石なり）。其由緒不明なれども此類浜井川の墓地にもあり。愚按には坊住山等の再興の時に建たる物ならんか。此処に天明十六丙午年に建たる石祠もあり。又回り二丈余の大槻ありしを七八年前に焼け失ひたり、今其根残れり。

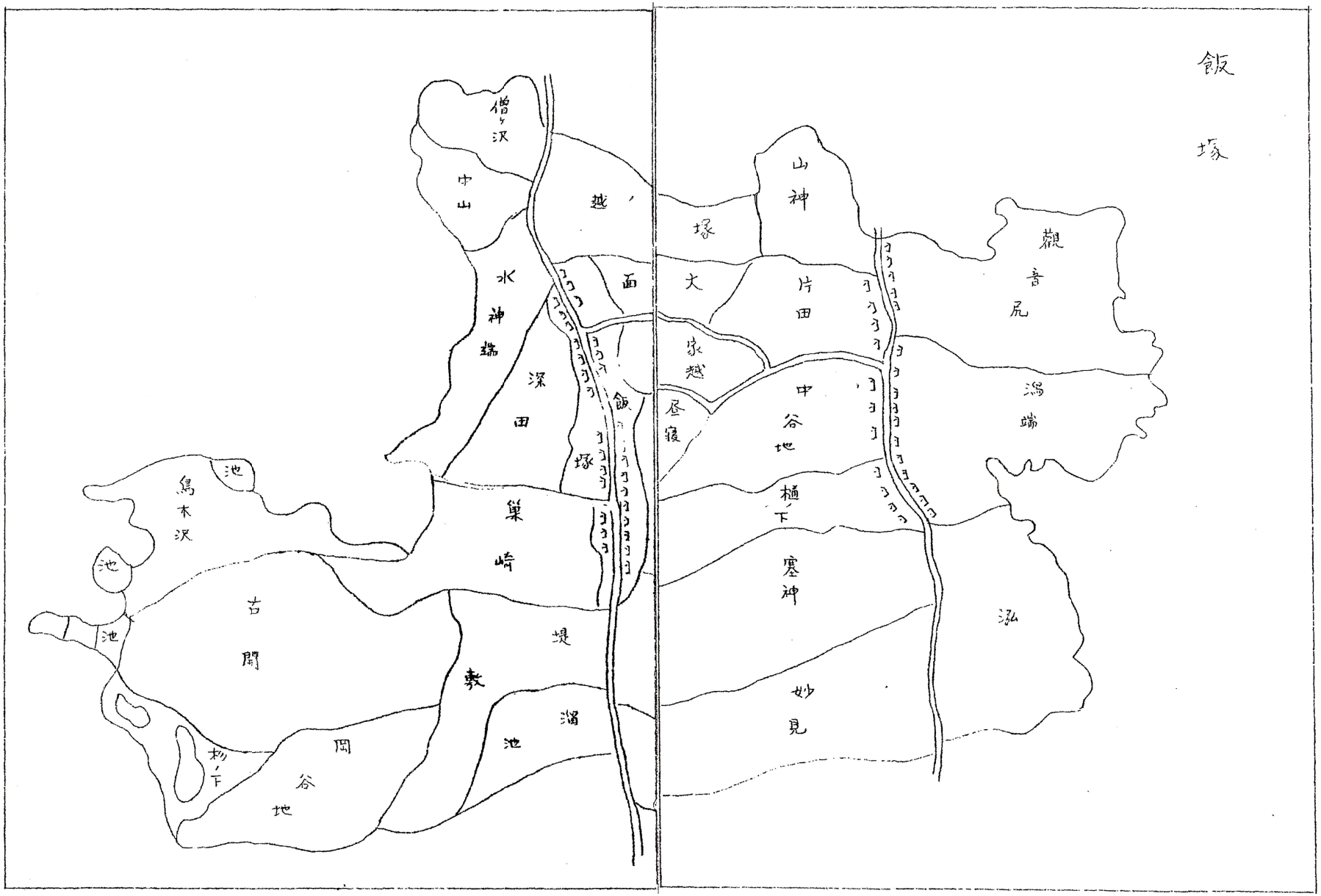
諏訪神社

字諏訪前の田の中にして旧国道の傍にあり、年代不詳。

飯塚の部

地景　岩石　土質

本部落山手畑地には第三紀又第四紀古層少しくあれども、田地は凡て第四紀新層なり。大変動に妹川と坂本との水勢によりて総て深く破れたるの地なり。故に沼地生じて腐植土多し。浜飯塚と本村との間に埴土あるのみ。岩石は頁岩、砂岩、凝灰岩等なり、土質は腐植土多く、埴土少し。


飯塚
僧ヶ沢
中山
越
水神端
面
深田
飯
塚
池
烏木沢
巣崎
池
古間
池
堤
溜
池
敷
杉ヶ下
岡
谷
地
山神
塚
大
片田
親音尻
寂越
昼寝
中谷地
潟端
樋ヶ下
塞神
泓
妙見

古館及村名

字中山にあり、国道の東部に聳たる地なり。元と飯塚越前といへる人の旧館なりといふ。村名飯塚は此館主の苗字なりや。村名を館主の名字にせしや詳ならず。

水神端　古宮地　不動瀧　石器産地

本字水神の田の中に水神の石祠あり、南部の山に不動の小瀧あり。こゝは安政の頃ならんか門間長之丞十六羅漢を彫せし処なり。其傍に産土神の古宮地あり、此処より石器類出づ。此山は凝灰岩にして下も山辺より稀に風化したる中より石材となるべきもの出ることあり。

巣崎

山に続きたる字なり、巣は洲なるべし。変動の時に山岸の洲崎なりしこと地景にも知らるるなり。

腐植土の地

本部落の地は沼地の埋りたる地多くして古開、岡谷地、堤敷、深田、巣崎、塞神、妙見等皆沼地を開田したる地なり。地景を以て変動当時の水勢を知るに足る。

産土神の移転

古くは妹川村観音森の中より出たる仏体なりといふ。其後飯塚水神端の岡に移し、年次今の中山に移せり。元観音森より顕出したるを以て、今も年々祭事には観音森に頭前の人参詣するを例となれり（中山に移せるは嘉永二年なりといふ）。

旧国道

妹川観音森より浜飯塚に通して、浜井川村新屋敷の沖牛ましに出づ。

塚越

国道旧里標壱里塚の傍なれば、一里塚の腰といふ心ならん。

金山の部

地景　岩石　土質

和田妹川の沢上にして一の谷間なり。岩石は頁岩多し、又石英粗面岩の砂の冠れる地多し。土質は埴土多くよろしき方なり。腐植土等多し、又田は地深く柔かなり。

冷泉

家の前産土神社の田の中に出づ。幾分の湿気ある為めか稲草の成育もよろしといふ。此南部の山の隣に山田村の湯の沢といふ林山あり、是等に山脈の通せるならんか。

金山の村名及金屑畑

金山は鉱山の名なり。和田妹川にある佐藤治部なるもの此処に鉱業を営みしならん。平の沢田の岸に金屑畑といふ処あり、是等は製錬場の跡ならんか。其他処々に金屑ありといふ。

石英粗面岩の砂

此部落の東部に坂本の小野地といふ処あり。此野山には赤禿と唱へて草の生ぜぬ砂地数百あり、変動に地辷りせし跡なり。これと同じ地質にして、石英粗面岩の岩の地上に冠りしものなり。二十九年の大地震にも平の沢処々地辷りありしなり。

飯田川旧蹟考附録

飯塚十王堂

飯塚十王堂の始は不詳。元と飯塚は浜飯塚の方は本村にして、浜飯塚は秋田城之介の時代までは湊ありし処ならん。此十王堂は岡飯塚の北部に馬洗場の堰あり。水下則街道より西の方に今も石碑など建る処あり。これは十王堂の古屋布のよし。享保三歳十王堂建立の奉加帳あり、庵主の名なし。其前文に

一　野州芳賀郡茂木領飯野村福性院宥弁弟子、今度回国に出申候。于時正徳四歳午九月より関東方面回り、同十二月に至り上総国長南庄野牛村天台宗善性寺に越歳仕。翌歳未年奥州に下向し、仙台城下一見。是より塩釜明神、松島五大明王参詣仕り、達谷窟百八体毘沙門天。是より平泉高舘一見。是より南部盛岡、八戸湊へ通り、田名部釜臥山、おそれ山地蔵菩薩其外名所旧跡有是。浜出脇沢村より津軽え船頭の渡申、保呂月と云浜に舎利有是より、青森城下弘前寺町不残一見。是より愛宕山参詣。是に庵主有之宗順坊より松前と渡る書状を申請。是より十三湊通り、同小泊村片刈石峠を越藤島村出。則船を頼み、運賃金壱両弐分に頼み、頃は未七月四日殊外風荒く難義仕り松前へ。船漸く日八ッ時分に松前城下船着申候。則殿様御菩提所法憧寺へ津軽よ

り御状差上申候えば、則和尚様より御使僧に被仰遣候ば、此方は諸旦中取込申候故、旦那の内へ宿申付候間休息可仕由被仰下候。此方より返答は少も不苦候間、御寺に被指置被下度申上候へ共、達て旦那の処へ罷越七月十二日迄居申候。其間宿孫ェ衛門を頼み申候て何ども狄ヶ嶋、臼ヶ嶽へ参詣仕度願申。其段法憧寺へ窺可申由孫ェ衛門被申候。依是狄地へ通判早速被下。七月十二日孫左ェ門所出立狄ヶ嶋、臼ヶ嶽へ心懸け、同八月十八日に臼嶽参詣。是より下向仕り臼の間松前泊川六右衛門と申人の船に其夜一宿仕り候。是より内裏嶽へ山嶽一見仕申候。九月九日に松前に帰り申候。扨々此方の地とは何角様子殊外替り面白く御座候。是より右津軽へ渡海仕候。同津軽弘前へ出、是より黒石へ通り無残一見。百沢権現へ参詣仕り、是より羽州秋田へ通り申候。同十月八日に秋田五十野目村に通り申候節、高崎村太兵衛と申人宿を借可申と被申候間、此処に一泊仕り翌日高崎村村上与右ェ門処へ罷越一泊仕り、天気悪敷四五日逗留仕。其間に与右ェ門被申候は、最早是より雪降り申候間此方に越歳仕り候様にと被申候間、則同村宝蔵院に越年仕居申候。翌歳同郡夜叉袋村庵主法入房の御執持にて飯塚村十王堂享保元年申の三月十二日に移り申。于時享保三歳戊正月廿四日に一郷の親方老百姓十五人当十王堂寄合仕。其節何れも相談申候は十王堂造立仕度願申候えば我同前に願申候間、一郷勧化可仕由。依是一村各々に奉加仕り申候。則享保三歳戊九月造立御成就仕申候。奉加金〆二十四貫三十五文。十王堂造立入目三十貫四百八文。差引銭六貫三百七十三文不足。

于時元文四天未七月吉

供養導師東伝寺吟龍和尚

同八月十五日供養相勤申候

此奉加帳の人名に門兵ェというものあり。今の門兵ェ坂というは此者の居りし処なるべし。

一　金壱両。但銀六十目。此銭四貫八百文。七百文米一俵代とあり。四貫文大工三十二人手間代。地築手間とあり。手間代一人百弐拾文宛。檜角一本銀六匁五分宛。一匁に銭四十九文。

古書付の中に

飯塚村

一　十王堂　社地　東西六間　南北九間

右は平地にて囲み松杉大小有。堂大さ三間。四面但し板造り。

別当道心　海円　印

正徳四年午六月四日

野内九右ェ門殿

米川隼人殿

一　十王堂
　右は縁記由緒無御座候。古来より有来せり。
元禄十二卯年一郷にて建立仕候。地頭小野岡市太夫殿より四ッ高四ッ成の処十王堂屋敷に被下候已上。
　正徳四年午六月四日　別当道心　海円　印
　米川隼人殿
　野内九右ェ門殿

飯塚観音堂

　正徳四年の書上に曰く
一　観音堂　右は観音尻と申す処に御座候。承伝申は昔右在所関尻潟中にて水の上度々光り申に付、村老ども気を付け見申候処、水の上に朽木の様なる物浮見得申候故取上げ見申候えば仏体に御座候間、其頃方々物知に為見申候えば正観音に紛無之由申に付、夫より当村にて御堂を建て建立仕申候と承伝申候。右御身体于今御座候て、年々不怠六月十七日にて観音祭礼相勤申候。其頃の棟札年号相知れず申候。其以後度々建立仕候。建立は宝永七年寅年郷中にて建立地頭小野岡市太夫殿、小川刑部右ェ門殿より造酒米七斗年々被付置候。此外縁記由緒無御座候。
一　伊勢堂　開基年代不詳　中興は元和四年一郷にて建立仕候。
一　保呂羽権現堂　開基年代不詳　右堂宝永七寅年郷中にて建立仕候。
一　三輪大明神堂　右開基年代不詳　破損仕当分無堂にて棟札も無御座候。
　右四社とも縁記年代不詳。一郷にて建立仕候以上。
　別当大倉村修験　源養坊　印
　正徳四年午六月四日
　米川隼人殿
　野内九右ェ門殿

同時の書上に
　伊勢堂
一　観音堂　社地　東西四十間　南北三十間（但東は沢の上大杉より、西は鳥井下田端なて、南は小道より、北は大松まで）
一　保呂羽権現堂　内　拾間　十二間　同庭の内
　右は台山にて大杉四本、大松二十本、雑木は八本柴立あり。
　伊勢堂　大さ三尺四面　但板造り
　観音堂　大さ三尺四面　右同断
　鳥居　高さ七尺　幅六尺
　長床　梁間二間　行間五間　但板造り
　保呂羽権現堂　大さ二尺四面
一　三輪大明神社地　東西十八間　南北三十間（但東は長根より、西は道端まで、北は沢より、

南は長根切り）

内　二間　一間　同庭の内